

オーバーロードRTA 王 国救済の裏技

星デルタ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女と骨をたぶらかすハーレム系RTA、はじまーるよー。
オーバードRTA小説を見たので二番煎じです。

目

次

キヤラクリの裏技

第二話の裏技

第三話の裏技

第四話の裏技

第五話の裏技

閑話

第八話の裏技
第七話の裏技
第六話の裏技

79 73 62 45 35 25 17 8 1

キヤラクリの裏技

モモンガ様に嫌われたら終わり！　乙女ゲーも真っ青なメンヘラホモ攻略RTA、はーじまーるよー！

今回はとんでもない自由度と鬼のような難易度を誇ることで大人気のタイトル『オーバーロード』42人目の超越者』をプレイしていきます。

このゲームの自由度は今更語るまでもありませんね。原作に存在しなかつた大量のタレント、プレイヤー、現地人、はたまた大陸外のモンスターに生まれてそこで自分の国を造ることも出来る圧倒的な作り込み……。制作者は悪魔に魂を売ったに違いないと評判のこのゲームには、原作通りのナザリックルートの他にも様々なルートが存在します。

今回はその中でも簡単な部類の、王国を存続させることで得られる称号【救国の英雄】獲得ルートを走っていきたいと思います。

王国と言うクソザコ国家くんは原作では国民を大量虐殺されて王族も殺されて身内

は裏切つててどこもかしこもオワオワリ、亡国待つたなしの詰み国家でしたが、なんと主人公の行動次第では生存でき、それどころか原作で言う帝国の様に同盟国としてナザリック魔導国と同盟を結ぶことも出来るんですね。

まあだからって被害を全く被らないかと言つたら話は別ですが、一応将来的にはナザリックと共に榮共生の関係を結ぶことが出来るかもしれないというだけで十分でしょう。鶏口より牛後の方が良いってはつきり分かんだね。

さて、詳しい解説は後で行うとしてさっそくキャラクリに入りましょう。先ほども言つた通り、王国生存ルートはそこまで難しいものではありません。

カルネ村にエンリちゃんとネムちゃんがいましたね？ 常にパーソナルエクトコミュニケーションをたたき出す怪物姉妹です。彼女たちはその純粋さとバケモノじみた幸運でナザリック勢にそこそこ気に入られていました。だからこそカルネ村はあそこまで発展できたわけですが、あれと同じことを王国で行えればいいだけです。アインズ様にこびへつらいナザリックすげーすげーと言つておけば、屈指のチョロインであるアインズ様はホモの手のひらの上で転がしてくれます。楽勝ですね！ この戦い、我々の勝利だ！

……と言うとでも思つたか？

残念ながら王国全体を生存させるにはそれだけでは足りません。原作のアインズ様

はN P Cに勘違いされて世界征服への道を歩んでいます。そのため多少主人公が好感度を稼いだところで、『それはそれ、これはこれ』と言わんばかりに王国くんは犠牲になってしまいます。AINZ様もちょっと人の心が分からぬところがあるので（婉曲表現）、ナザリツクの為になるなら躊躇つたりしません。

なので主人公君は最低でもゲヘナ作戦の前に王国を超優良国にし、ナザリツク勢に『王国は生かしておいた方が利益になる』と思わせなければいけません。マゾゲーにも程がありますね。こんななんでもまだ他のトロフィーよりは簡単という所から、制作陣のつくり込みと簡悔精神が垣間見えます。どこの三叉路で悪魔に出会つたんでしょうか。

ということで主人公の出生は現地人、それも王国の貴族で行きます。ナザリツクプレイヤーにするとユグドラシルをプレイする時間が余計にかかり、さらに王国は原作通りのカス国家のままであるためAINZ様やN P Cの説得も難しいです。だから現地人の貴族にする必要があつたんですね。

主人公君の名前はホールド・モルデラ・デイル・イズエルク。親しみを込めてホモ君と呼んであげましよう（伝統美）。

種族は当然人間で原作開始時に18歳となるように設定。これは後々説明します。イズエルクは原作でも登場した名前で、王派閥の中堅ですね。大貴族として生まれると最初から政治闘争に組み込まれてしまうので、ちようどいいポジションです。容姿を

非常に優れたものにして、ステータスは知識と魅力に全振りします。職業は当然貴族です。

君出る作品違くない？ と言いたくなるような耽美系美少年が完成しましたね。このゲーム、キャラクリの自由度が非常に高いです。一部では自分を模した少年キャラを作つて疑似おねショタを楽しむぞ変態もいるとかいないとか…。おねショタの主導権をショタに握らせるな！（富岡義勇）。金言ですね。この言葉を胸に刻んで生きていきましょう。

さて、ここからはリセマラの時間です。王国は長年の積み重ねにより腐敗しきつております。貴族人を超えたスーパー貴族人でなければこのカス王国は変えられません。そのため、タレント『叡智の人』^{アボローン}と『カリスマ○』以上の二つは必須条件です。『叡智の人』はこのゲーム中最上級の頭脳系タレントで、ノーブルなどの知識系職業の経験値と頭脳を用いた行動に莫大な補正がかかるようになります。カリスマはまあ言わずもがなカリスマです。これが無いと周りの人々が言うこと聞いてくれませんからね。

両者とも非常にリア度が高いタレントなので一発で出るとは思つていません。ですがこれがあるのと無いのじや効率は段違いです。何度もリセマラしましょう。

イクゾー！

デツデツデデデデ！（カーン）デデデデ！

「おお、生まれたぞ！見ろ、元気な男の子だ！」

両親の喜ぶ声が聞こえる……。あなたは無事この世に生を受けることが出来たようだ。

オープニングムービーが入りましたね。さつさと操作できるところまでスキップしてタレントを確認しましょう。

タレント：『心優しい』『平泳ぎ○』

はいりせ。このゲーム、そもそもタレントが二つあるだけで大変レアなのですが今はクソの役にも立たないので残念ながらリセです。次のホモ君はきつとうまくやつてくれるでしょう。

タレント：『剣の才能△』

リセ。

タレント：『女たらし』

はいりせ。

タレント：『炎魔術○』

はいはりセツトリセツト。

タレント：『天性のコメディアン』

リセット……つてこれ初めて見るタレントですね。制作陣どれだけ準備してあるんでしょうか、ちょっと恐ろしいですね。

なんてことだ、君のリセは止まらない、加速する…！

タレント：『叡智の人』『魔性の貌』

はいはいリセリセ……おつと!? 出ました！ 目的のタレント、しかもめつたに出ない最上級が二つも！ 驚いてちょっとスクショしちゃいました。こんな事あるんですね……。やはり走者としての私の力量が運を引き寄せてしまったのでしょうか（隙あらばイキリ）。『魔性の貌』は正確には魅了系タレントの最上位なのですが、カリスマの効果も併せ持っているので問題ないでしよう！ ここまでにかかった時間はなんとたつたの23分弱。すでに走者はやり切ったような達成感に包まれていますが、ここからが本番です。

次は王国一の天才にして世界一歪んだ性癖を持つ女、ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ。彼女とのコミュを築かなければいけません。では、自由

行動が可能になるまでスキップで駆け抜けていきましょう。
今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

第二話の裏技

幼女に声掛け事案（意味深）していくRTA、はーじまーるよー。

前回は走者の類まれなる豪運で最高級ホモくんを手に入れたところまででした。今回は幼少期にできる限り知力を伸ばし、5歳時点でラナー王女と出会う事を目的として走つていきます。

♪「流石でござります坊っちゃん。貴族の教育係として長年勤めてきましたが、まさか半年足らずでお役御免になつてしまふとは……。初めての経験でござります」

初老の男性があなたに向かつてうやうやしく頭を下げる。その眼には自分への尊敬と、少しの畏怖が混じつっていた。

はい、操作できるようになつてすぐイベントが入りましたね。主人公くんの才能は人類史上最高峰なので、初期に付けられた教育役ではレベルが低くすぐ教えられることが無くなってしまいます。さつさとクビにしてもらつてもつと高度な教育を受けさせてもらいましょう。

♪「なんと、今の教育係ではレベルが低いというのか。うーむ、仕方がない。王都から

もつといい者を連れてこよう

あなたの父親がひげを撫でながらつぶやく。隣にいるあなたの母親と共に、息子の才能にとても喜んでいるようだ。

「しかし、替えを呼ぶのには時間がかかる。その間、何かしたいことはないのか?」
よし、自由行動イベントが来ましたね。三歳まではろくなイベントが無いのでスキップしていたのですが、その途中の主人公の行動によつてはホモ君はとんでもないクソガキとなり、周りからの好感度も下がりに下がつてこのイベントが発生しなくなることがあります。今回はテキストから察する限り家族仲も良好なようですね。『魔性の貌』で好感度補正も入つているのでしょうか。

「あなたは王宮に行つてみたいと答えた。

「それはお前にはまだ早いだろう。考えておくから、他の事にしなさい」
どうやら断られてしまつたようだ……。

なんで(憤怒)?ダメだつて言つても行くんだよ王宮に……と言いたいところですが、これは断られる前提で言いました。他にも剣の修行がしたいとかガゼフ・ストローノフに会いたいとか言つてもステータスや名譽値諸々が足りていないので断られます。ですがここで王宮に興味がありますアピールをしておくことで、次回父親が王宮に行くときには好感度が足りていれば連れて行つてもらえるようになります。

「あなたは領地を見て回りたいと答えた。

「ふむ、領地を見て回りたいのか。いいだろう、護衛の騎士を付けるから、気を付けて行つてきなさい」

はい、ここで領地の状態を確認することが出来ます。先に言つておきますと、領地は100%荒れ果てています。このゲームでは原作通り、エ・ランテル領以外にまともな領地は存在しません。クソみたいな領地で可愛いね。王国の未来を憂うわ。

ですがクズにも十人十色と言うように、荒れた原因もそれぞれ違います。帝国と繫がつてるとか、土地が貧しいとかですね。その中でも『八本指によつて汚職が進んでいる』だと一番ありがたいのですが……。

あなたは護衛を連れてイズエルク領を見て回つた。道ゆく人の顔は暗くこけており、民が飢えていることが一目で分かつた。

『叡智の人』^{アボローン}があなたの眼に知恵を授ける……！

あなたはスラム街が町の規模に比べて大きい事と、そこに出入りする地方莊官に気づいた！

よつしやあ！ このテキストが出たということは八本指が領地に蔓延つてゐる事確定です！ 余計なことしかしない害虫にたかられたイズエルク領くん可哀想…今助けあげるからね♡

あなたがスラム街を見ていることに気づいた護衛騎士は悲しい顔をしながら帰還を提案してきた。

従うしかないようだ…。

これで『領地に蔓延る八本指の存在に気づく』というフラグを得ました。帰ると父親から『明日から別の教育係が来る』と伝えられます。超スピード!? と言いたくなりますが、まあゲームなので仕方ないです。テンポの犠牲になつたのだ…：犠牲の犠牲にな…。

ちなみに次来る奴も全体から見ればせいぜい下の上くらいなので、どうせまた半年程度でいなくなることになります。ここからしばらくは教育係が来ては去つていく繰り返しで画面が単調なので、倍速でお送りします。

甥の木村、加速します（倍速中）…。

この倍速処理中にルートに関して説明しておきましょか。今回のルートにおける

キーパーソンは3人います。

一人目はメンヘラ骨太郎ことアインズ・ウール・ゴウン。これはもう言うまでもありませんね。いくら王国が強国に成長してようが、ナザリツクにとつてはアリがちよつとでかくなつたようなもんです。全く違ひがありません。いかに早くナザリツク勢と友好的に接触し、アインズ様的好感度を稼げるかが肝になります。

二人目は法国の執政官たち。残念ながら王国に自淨作用なんざ期待するだけ無駄です。どこかで腐敗した貴族たちを切り落とす大肅清を行わなければいけません。そのための武力調達先として最も有用なのが法国くんです。もともと法国くんは王国に豊かになつてほしかつた立場なので、ちょっと主人公が有能さを発揮すれば精銳部隊を派遣してくれます。なんや法国くんチョロインやんけ！ いっぱいちゅき♡

三人目にして最も攻略手段に難儀するキャラが、我らがヤンデレ腹黒王女様、ラナ！ ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフです。原作ではナザリックにいち早く接触して売国かました行動力ありまくりのヤンデレです。その暗黒の頭脳はナザリックの最上位勢にも匹敵するとかいう、まさに生きるバグみたいな存在です。ですが幼少期は自分と周りの人との乖離に悩むかわいらしい一面もあり、まさにそこが攻略の鍵になります。

このルートでは彼らを最大限活用しまくつて王国の軟着陸を狙いましょう。

まずは幼少期に教育係を変えまくつて天才エピソードを存分に貯めていきます。こうしているといずれ『イズエルクの一人息子は大変な天才であるらしい』との噂がどんどん広まつていくので、名声値の上昇も見込めます。

噂が十分に広まつたと判断したら、父親と共に王宮へ向かい、ラナー王女と接触します。彼女は当時『訳の分からないことを言う不気味なガキ』と避けられているので、そ

の心の隙間に付け込んで（ゲス）、何とか『王国にはいい人間もいる』と思つてもらいましょう。将来の売国を避けることができ、曲がりなりにも王族の権力を借りることで領地の運営や他陣営との交渉がうまくいきやすくなります。どこに地雷があるか分からぬ彼女はほぼ猛獸みたいなもんなので、丁重に扱いましょう。暴れるなよ：暴れるなよ…。

「あなたが五歳の誕生日を迎えてからしばらくたつた。すでに王国内で最高の教育係がつけられているが、彼もまた半年持たずに変わつてしまいそうだ。」

「ある日、父親が王宮に登庁するということで、あなたも一緒に連れて行つてもらえることになつた。」

「いいか、王宮は一枚舌ばかりの伏魔殿だ。お前なら心配ないと思つて連れていくが、何か困つたことがあればすぐに私に言うんだぞ」

「真剣な表情をする父に、あなたは笑顔で頷いた。夢にまで見たキラキラの王宮！ どんなものがあるのか、今からあなたは楽しみで仕方がなかつた。」

「わ、い、な、あ、ホモ君……。選択肢でカルマを上げまくつたホモ君は超有能な善良ショタです。蒼の薔薇のショタコンが見たら黙つてないでしょ。こうでもしないとナザリツクに寝返つちやうからね、仕方ないね……。それでは王宮に着いたらラナー王女に会うために中庭、図書室、庭園裏の順番で見て回りましょう。」

「あなたは庭園裏に足を運んだ。手入れの行き届いた薔薇園から少し離れたここは、雑草と虫で荒れ果てている。今の王国を象徴するようなこの場を見て、あなたは少し嫌な気分になつた……。」

「！ あなたは一人の少女が一人でうずくまつていてるのを発見した。」

「お、ラナーちゃん発見しましたね。途中二回からぶつたのはガバですが、まあ誤差だよ誤差。早速話しかけましょう。」

「あなたは……？」

「私、ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフにとつて、王宮というのは実に息の詰まる場所だった。」

「無能。無能。無能。私の周りにいる人たちはどいつもこいつも脳を胎内に置き忘れたんじやないかと思うくらいの能無しばかりだつた。」

「誰も私の言うことを理解してくれない。それどころか、自分の無能さを棚に上げて『あいつは意味の分からないことしか言わない』と蔑んでくる。」

どうして？ 私はただ理解してほしいだけ。もつと効率のいい手段、もつと手際のいい解決策。もつと皆が幸せになれる方法を教えてあげたいだけなのに。精神の異形種。私はきっとそう呼ばれるべき存在だつた。彼らが私を理解しないのと同様、私も彼らの事が理解できないのだから。

世界で一人しかいないような疎外感。周りから疎まれることへのストレスはまだ幼い私を蝕み、私は徐々に衰弱していく。

この先、自分には二つの道しかなかつたと思う。つまり、誰にも理解されないことを悲しんでゆるやかな自死にむかうか、余計なモノ全てを振り切つて完成されたバケモノになるか。

どつちにしろそれはもうヒトではない。幼い私、ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフはここで死ぬ運命にあつた。
だから。

だから、私が彼の事をどう思つているかなんて、今更言うまでもないだろう。

唯一私を理解してくれた人。唯一私に理解させてくれた人。彼といふ時だけ、私は普通の少女の様にはしやぎ、思いつきり息をすることが出来た。

今は彼こそが私にとつて唯一の同種。

この凡愚しかいない世界で、ただ一人しかいない私の大切な人。

彼はまだ王国のカスどもを救うことに奔走しているみたいだが、いつかきっと気づくだろう。彼にとつて、私以外のすべてが取るに足らないこと。そして私が彼に並びたてる唯一の同類だということに。その時、知性が劣る虫けらのような存在を今まで丁重に扱つていたことをきつと恥ずかしく思うはずだ。

まあ、それまでは許してあげよう。何の価値もないガラクタを大切にしているのも見逃してあげよう。

「夫のコレクションを許してあげるのも、妻の度量というものですものね」

世の中にはそれで離婚するものもいるというのだから度し難いものだ。私はそういうないように気を付けておこう。スポンジのような脳を持った下等生物も、彼が愛しているのだから大事にしてあげよう。

「……何かおっしゃいましたか、ラナー王女？」

「ふふふ。何でもありませんよ、私のホールド」

「ただ、いつまでも私より大事にしているようだつたら……その時は、私が捨ててあげるわね？」

第三話の裏技

何が嫌いかより何が好きかで自分を語れよ！　なＲＴＡ、はじめーるよー。

前回は天才児の評判が高まつてラナー王女とコンタクトできたところまででした。今回はラナー王女のコミュと領地の八本指対策を進めていきます。

♪「あなたは……？」

あなたの声掛けに反応し顔を上げたのは、この国の第三王女であるラナー王女だつた。

絹のような金髪がキラキラと煌めき、大きく青い目はまるで宝石のようだ。聞きしに勝る美貌に、あなたは驚いた。

↓見なかつたことにして立ち去る

周りを見たいのでどこかに行つてもらう

＼磨かれた観察眼で、あなたは彼女が深く落ち込んでいることに気づいた！

↓見なかつたことにして立ち去る

周りを見たいのでどこかに行つてもらう

彼女と話をする

はい、選択肢が出ましたね。今の選択肢、知性が一定以上でなければ最初の2択だけだつたんですよ。かの超人気RPGペルソナシリーズのことく、ステータスが高くなれば選べない選択肢がこのゲームにはよく登場します。ちなみにカルマ値が超低かつたら「今のうちに弱みを握ろうとする」になります。人間の屑がこのやろう……。

／＼あなたは落ち込んでいる彼女に、一緒に遊ぼうと誘つた。

うーんこの良い子ムード。リセマラですなんだ心に沁みますね。同人誌に出てくるような超純真系ショタであるホモ君は彼女の事を見過ごしたりしません。

走者としてはマジでこいつに何度もリセットさせられたか分からないので爆弾解除の気分になつてますがね。

／＼「わ、わたしとですか……？」

彼女は戸惑つた表情を浮かべながら、こくりと頷いた。

「それでは、庭園でおままで」とでもしましようか？ それとも追いかけっこのはうがよろしいですか？」

お、ラナーちゃんから遊びの提案をしてくるのは珍しいですね。好感度補正が入つているのでしょうか？

とはいっても子供チックな遊びをしてはいけません。

今、彼女の視点では『ちょっとかわいい動物がじやれついている』程度の認識でしか

ないのです。知的遊戯に持ち込んで、目の前にいる相手が自分と同格の知性の持ち主であることに気づいてもらわないと困ります。

／＼あなたは彼女に軍棋で遊ぼうと言った。庭園にはくつろぐためのテーブルがあり、手慰みにいくつかのボードゲームも用意されている。

当然！「軍棋」だッ！

祖先から受け継ぐ「軍棋」ツ！ それが流儀イイツ！！

と言ふことでラナーチャンと軍棋で遊びましょう。チップパンとボードゲームなんかやりたくないラナーチャンは渋りますが、純粹さと勢いで押し切ります。ちなみに軍棋というのは王国の上流階級が良くやる遊びで、まあチエスと将棋の間みたいなもんです。ラナーチャンの知能はすでにこの王宮の誰よりも高いですが、積み重ねた教育の分ホモ君の方が上です。コテンパンにしてやりましょう（リセ地獄の恨み）。

／＼強い……！ 当然手加減してあげるつもりだったあなただが、すでにそんな余裕はどこにも無くなっていた。今はまだ自分がアドバンテージを保っているが、一瞬でも気を抜けば陣地を喰い破られるのが分かる。ここまで自分と互角に戦える人は今まで居なかつた。あなたの胸に同格の者としのぎを削り合うことの楽しさが満ちる。

／＼「ふふつ、あはは……っ！」

／＼目の前の相手もそう思つてゐるのだろう、瞳孔を開いて笑う彼女の顔には純粹な喜

びがあふれていた。

「ああ、とても楽しいですね……！」もう少し、盤面を増やしませんか？」熱中したあなたたちは二面指し、三面指しと盤面の数を増やしていき、ついに目隠しでの十面指しへと突入した。

うわつラナーちゃんの目こわつ！ 生まれてからずつと続いていた孤独から解放されたラナー王女は大変楽しそうですね。怪物が本性を解放しているようにしか見えず、なぜか寄生獸の頭が割れるシーンが思い浮かんでいますが、きっと気のせいでしょう（植えつけられたトラウマ）。

怪物二人の異次元コミュニケーションが行われている間、ラナー王女に気に入られてこれからどうするかの話をしましようか。

今回のルートを走るにあたって、大きな障害になるのがラナー王女です。彼女は美しい見た目の裏にどす黒い人間性を抱えており、原作ではナザリックと接触して、自分の望みを叶えるために王国を滅亡させようとします。

当然阻止したいのですが、現地人ルートではどうやつても彼女の人間性を矯正することはできません。原作でも『精神的異形種』と言われた彼女は根本から歪みを抱えており、それ専用のジョブを持つたユグドラシルプレイヤーでもなければ彼女を常人に戻すのは不可能と言えます。

なので稀代の天才である主人公と早めに接触させ、『なんだ、人間にもちよつとは同類がいるじゃん』と思つてもらう必要があります。そうすると彼女の内で人間が『種族から違う劣等生物』から『そそこそこ見どころもある低能共』となつて、歪みを最小限に抑えることができます。

そうなつた彼女はよっぽどのことではナザリックに靡いたりしません（靡かないとは言つてない）。気分は荒ぶるタタリ神を必死に鎮めようとアシタカのようですが、チャートのために彼女とはしつかりコミュニケーションを取つて、万一にも王国を売らないよう監視していきましょう。

あとはクライム君の存在が必要不可欠ですね。原作よりマイルドになつた彼女にかの忠犬を与えると非常におとなしくなり、同格である主人公の言うこともある程度聞いてくれるようになります。彼女の頭脳は非常に有用なので、王国救済の大きな助けとなつてくれます。主人公の力が弱い序盤に、王女の権力で無理を押し通すなんてことも出来るようになるわけです。

おつと、そろそろ親の用事が終わるころですね。すでにラナーにホモ君を印象付けることには成功したので、さつさと帰りましょう。
✓互いに駒の動きを言い合ううちに時間が過ぎ、気づけばそろそろ親の元に戻らなければいけない時間となつていた。

「もう帰ってしまうのですか……？」

悲しそうな顔をするラナーをあなたは慰め、父との待ち合わせ場所へと急いだ。待ち合わせに遅れたことを除けばとても楽しい時間だった。また王宮に行けば会えるのだろうか？

（会え）ないです。名誉値稼ぎのために、ここからホモ君には様々な領地改革に手を出してもらう必要があります。ラナー王女に会うのは本格的に八本指対策に乗り出すあたりからですね。

王都に一泊してからあなたたちはイズエルク領へと戻った。

ラナー王女と出会い、あなたはやる気に満ち溢れていた。丁度王都で最高と言われる教育係の教えも物足りなくなつていたところだ。今の自分なら、領地をもつと良くするアイディアが出せそうだ……！

はい、ここからは用水路の整備や輪作の提案など、領地をより良くするための行動を取っていきます。ここで好感度が足りない場合、生意気なことを言う息子だとして父親に断られてしまいますが、きちんと好感度調整をしておいたので問題なく受け入れてもらえます。

「なに、領地改革について自分に考えがあるだと……？」 うーむ、まあいいだろう、言つてみなさい」

自分の進言を父親はちゃんと受け止めてくれたようだ。普段の関係が良かつたことと、今までの教育係を見て優秀さを理解してもらえたのだろう。

あなたは笑顔で父親にお礼を言い、早速自分の考えを述べ始めた。

認められてウキウキのホモ君は可愛いですね（ボンドルド感）。ステータスも十分の為、打つ政策すべてが面白いように当たります。ラナー王女は人間の心が理解できていないので何度も失敗していましたが、この私とホモ君に手抜かりはありません。既得権益を侵さないように十分な根回しをし、足りない部分は人間的魅力でゴリ押ししていきます。この時のためにカリスマを取つておく必要があつたんですね。

（内政チート倍速中……）

＼あなたの幼さゆえに侮られることもあつたが、綿密な交渉と説得の結果、多くの改革を行うことが出来た。あなたの名はすでに領内に知れ渡つており、イズエルク領はとても豊かになつた。

＼だが、途中で何度も何者かに計画を妨害されたことがあつた。あなたの頭に以前スラム街に出入りする者が多かつたことがよぎる。何らかの闇組織がここにはいるのかもしれない……。

これも全部八本指の仕業なんだ……！　おのれ八本指！　なので表社会が豊かになつた次は裏社会へと踏み込んでいきましよう。次回は八本指の手がかりを得るために

に世界最大の暗殺組織、イジヤニーヤと接触していきます。
ということで今回はここまで。ご視聴ありがとうございました。

第四話の裏技

ヒエッ…。突然のホラー描写、大変失礼しました。メンヘラ彼女からのラインじやないですよ、ラナー王女からの手紙です。どうしてこんなに小分けにして送つてくるんでしょうか？ 人の心が分からぬ彼女が、恐怖を与える手法にだけは詳しくなつていて嬉しい限りですね（震え声）。

しかしおかしいですね……。ホモ君は年月が経ちすでに7歳になりました。二歳下であるラナー王女はもう5歳、そろそろクライム君を見つけておかしくない年齢です。彼を制御弁として扱えるかどうかでラナーチャンの御しやすさは天と地ほどに違つてくるのですが……。まあ今は良いでしよう。あんまり好感度を稼ぎすぎるとガバに繋がるのでですが、今回の対八本指ではラナー王女の王族としての力が必要になります。手紙を出さざるを得ません。ついでに一緒に孤児院巡りツアーも行つたらどうです？ 今ならクライム君がついて大変お得！（カス）

～あなたはラナーに近況報告の手紙を書いた。領地改革にやり甲斐を感じていること、改革の際に起こつた様々な出来事、その中で自分を認めてくれた大人たちのこと…。それらを綴るあなたの手がふと止まつた。

～八本指について、ラナーに相談してみてはどうだろうか？ もちろん自分の力で何とかする気ではいたが、彼女の頭脳なら何か思いつくかもしない。あなたは領地の八本指対策について悩んでいることをしたため、手紙を書き終えた。

手紙の書き方にも一々気を遣うのが怖いですね……。このままでは走者の胃がストレスでやられてしまいそうです。クライムーツ！　早く来てくれーツ！　ところで八本指について知らない方もいると思いますので、説明しておこうと思います。

八本指というのは原作に登場する超巨大な闇組織のことです。王国全体に勢力を伸ばし、貴族と癒着して利権を得ていています。原作ではアインズ様にゴミ掃除の様に気軽に片付けられて忠誠を誓つており、正直力マセ犬のイメージが強い彼らですが、それはプレイヤーという神の視点から見たらそうなるだけ。六腕という超級の武力も抱える八本指という組織は、現地人視点では逆らう気も起きないような大勢力です。

今回ホモ君が属するイズエルク領も彼らの手に落ちており、スマラムには怪しげな売人がのさばり、代官は汚職に手を染めて税をちよろまかしています。ホモ君によつて少し豊かになつたイズエルク領ですが、その分彼らに良い獲物として狙われてしまつたようです。そのせいで民の暮らしは全く豊かになつていません。なんてひどい……許せませんね（建前）、名誉値早く下さい（本音）。

こちらも彼らのことは名を上げるための獲物としか見ていない訳ですが、八本指と繋がつていて下つ端役人をいくらしよつ引いた所で何の意味もありません。代わりが来てすぐにまた汚職に手を染めるようになるだけです。

八本指勢力を領地から完全に根絶するためには、親玉、つまり汚職の根本を潰す必要があります。一番太いパイプを失えば八本指はもう入つてこれなくなるので、あとは残党狩りをすればいいだけとなります。

そしてその汚職の根本が誰かと言うと……なんとびっくり、ホモ君の父親です。イズエルクの当主が八本指とズブズブなんて最悪ですね。何回目の汚職だよ行き過ぎにも限度あり しかしその欲望誓れ高い（t n t n亭）。

しかしこれはありがたい事で、父親を排除すると自動的に一人息子のホモ君がイズエルク領の当主となります。名譽値も爆上がりですし、ゲーム的には悪徳領主を成敗したのでなんとカルマも上がります。いやー、なんて美味しいイベントでしょうか。色々な領地衰退イベントの中でも、八本指を引けたのは幸運でしたね！ 他の原因だとイズエルクの権力を握るのにもう少し手間がかかってしまいます。

さて、走者はメタ知識で父親の汚職に気づいていますが、曲がりなりにもここは法治国家。すぐに殺すことはできません。ホモ君の超優秀な頭脳だととつぐに気づいていてもおかしくないんですが、身内の情が判断を鈍らせていくますね。当主の肅清には大義名分も必要ですし、どちらにしろ決定的な証拠が必要になります。

ということではまずはイジヤニーヤに接触しに行きましょう。このような情報収集の際、よその貴族は冒険者を使っています。ですが今回の相手は八本指。潜入に向いてい

ない冒険者ではどうしても見つかってしまい、普通に殺されるだけで全く意味がありません。蛇の道は蛇、闇組織である八本指の情報を効率よく集めるには、どうしても同格の闇組織の力が必要になります。

「ラナーにもしもの時の助力を求める手紙を書き終え、あなたは改めて決意を固めた。何の罪もない人々を苦しめる八本指を、これ以上許すわけにはいかない。リスクを承知で、自分も虎穴に入る時が来たようだ。

「あなた一人で王国に長年寄生してきた巨大組織を完全に滅ぼせるはずはない。このイズエルク領の癒着の大本を突き止め、そちら側を潰すべきだろう。そのためには諜報に長けたものを雇わなくてはいけない。八本指の情報を得られるほどの手練れで、なかつ王国最大の組織である八本指の息がかかっていないもの達。そんな都合のいい存在が果たしているだろうか……。」

「『叡智の人』があなたの思考を研ぎ澄ます……！」

「あなたは帝国を中心に活動するイジヤニーヤと呼ばれる組織を思い出した。彼らと何とか接触を取れないだろうか。」

「ふと頭をよぎった『自分の父は何も八本指対策をしていないのだろうか』という疑問を振り払い、あなたは足早に部屋を出て行つた……。」

因みにイジヤニーヤの情報は最高レベルの教育係じやないと教えてくれません。こ

の世界、踏んだら一発で死ぬ地雷が大量にあるのにそれを知るのにすら苦労するっていうのが本当に嫌ですね…。ちなみにホモ君は帝国や法國についても一定の知識はあります。誇り高い王国貴族として当たり前だよなあ!! 他の貴族が無能すぎるだけってそれ一番言わてるから。もっと勉強して。

いやー、しかしホモ君の思考は7歳児のものとは思えませんね。王国最高峰の教育に世界一の才能が合わさっているので当然とも言えますが、一人で暗殺組織に接触しようなんて思える度胸も大したものです。私のチャート構築能力の賜物ですね（隙あらばイキリ）。

＼イジヤニーヤの情報について集めること数日。独立した犯罪組織である八本指と違ひ、彼らは依頼を受けて動く暗殺集団である。そのためどうか、あなたは驚くほど簡単に情報を集めることができた。

＼狙われたら誰も逃れられないと言われる凄腕の暗殺者たち。しかし、向こうから指定された場所へ向かうあなたの足に恐れは無かつた。自分は正しい道を進んでいるという思いが、あなたに力を与えているのだ。

傷ついた体でも勇気が湧いてくる…「正しいことの白」の中におれはいるツ！（ボルナレフ感）。

ちなみにこの会談でティア・ティナネキと接触することはできません。彼女たちはイ

ジヤニーヤの中でもトップの腕前を持つので、こんな木つ端依頼では動いてくれません。残念です…。

／会談場所は薄暗い酒場だつた。わずかな照明の中、テーブルで黒い外套を纏つた人物が一人佇んでいるのが見える…。

自分は帝国の貧民層に生まれ落ちた。帝国は王国に比べれば豊かな国だが、どこの国にだって弱者は存在する。自分はそんな掃いて捨てられる弱者の一人だつたというだけだ。だからだろうか。イジヤニーヤに流れ着いた今では薄まつたが、貴族階級に対する苦手意識は未だに存在する。

(余計な事は考えなくていい…。自分は一つの道具、思考は足枷になるだけ)

内心でそんなことを思いながら、依頼を受けた女暗殺者は約束の酒場へと出向いた。薄暗い酒場で待機し、依頼主の事を想像する。わずか7歳で暗殺組織に依頼するような少年。よっぽど悪意に満ちた人生を送ってきたのだろう。そう同情していると、テーブルの前に一人の少年がやってくるのが見えた。

「こんにちは。今日はいい天気ですね？」

太陽が落ちてきたのだと思った。

ホールド・モルデラ・デイル・イズエルク。イズエルク領の鬼才。情報はすでに聞いていたが、どうやら漏れがあつたらしい。こんなにも明るく、人を引き込む魔力に満ちた存在だったとは聞いていなかつた。

「……いいえ、今は寒いです」

「ああ、そうでしたか。では奥でシチューでもいかがですか？」

取り決めておいた符牒を交わし、マスターに目配せをして奥の部屋へと案内してもらう。人払いと盗聴対策がなされた特別な部屋だ。

「改めまして、依頼主のホールドです。今回の依頼について説明しますね」

そう言つて少年は話を進めていく。事前に首領からある程度の話は聞いていたが、求める情報の種類や現地の事など、細かい部分を詰めていく。淀みなく話す様子はまるで熟練の交渉人のようで、見た目の幼さとは不釣り合ひだつた。

「なので、彼らの親玉を抑えるためにも、隠密性を重視してもらえると助かります」

彼は危険を感じていないのでだろうか？ 依頼主とはいえ、暗殺組織と接触するのだ。

最近のイズエルク領の改革は全て彼主導のものだと聞いている。何がそこまで彼を突き動かすのだろうか？

……気に入らない、と思つてしまつた。何も苦労を知らない、世の中の醜い部分を見たことがないような顔が瘤に障る。刺々しい思いが自分の中を満たした。

「……一つ、質問したい」

「何ですか？」

気づけば、自分は口を開いていた。唐突な質問にも関わらず、相手は全てを見透かすような優しい顔をしている。

「あなたは、領民のためにしなくてもいい苦労をしている。そう思つたことは無い？」

今、自分は依頼に関係のない話をしている。暗殺者は機械に徹するべき。この話は即刻切り上げなければならない。そう思つても、勝手に動く自分の口は止まる気配を見せなかつた。

「あなたは間違つている。貴族ならもつと自分の欲望のままに動くべき」

例えば、民に重税を課した故郷の貴族たちの様に。

「あなたに助けられた人は、あなたが思つてているほど感謝してくれないかも知れない。助ける価値のある人間じやないかも知れない。そんな奴らを相手にするのは愚か」

例えば、裏切つて自分を売つたスラムの大人の様に。世の中には救いようのないクズ

がいるのだ。それは、そう――例えば、環境に耐えかねて人を殺した、自分の様に。

悪意に満ちた自分の言葉を聞いて、ホーリドは驚いたようだつた。彼はしばらく悩む

そぶりを見せた後、悲しそうに微笑んでこう言つた。

「何か、辛いことがあつたんですか？」

思わず固まる自分を見つめながら、少年は続ける。

「僕は、自分のことを大した人間とは思つていません。自分の欲望に従つて動いていますよ。人は周囲の環境によつて善にも悪にもなります。助ける価値のない人間なんていませんよ。人は皆幸福になる力を持つてゐる。それをちよつと手助けするのが、僕の幸せなんです」

だから、あなたもその手助けをしてくれませんか？

そう言つてにつこりと笑つた。人々を照らす、太陽のような明るい笑顔だつた。

なんて純粋で、穢れが無く、美しいのだろう。

現実を知らない理想論だ。そう言うことは簡単だつたが、既にその気も失せた。

暗殺者に意思是いらない。ただ動く機械に徹するべき。ちよつと会話をしたぐらいで依頼人に絆されるなんてもつての他である。だがしかし、善人に好感を抱くことは当然のことだ。だから、自分の顔が赤くなつてゐるのもしようがない事なのだ。

誰に言い訳するでもなくそう考えながら、ふと今ならティナの趣味も分かる氣がする
と、そう思つた。

第五話の裏技

生みの親にアゾット剣をキメていくRTA、はーじまーるよー。前回はイジャニーヤとうまく接触できたところまででしたね。今回はイズエルク領の八本指を一掃し、来るべき王国大肅清のための下準備を行つていきます。

／イジャニーヤとの接触が済んでから2か月が経過した。あなたとラナーは手紙で密に連絡を取り合い、あなたの独断による行動が王宮で問題となつた時に後ろ盾となってくれる約束を交わしている。彼女とはその他にも沢山の雑談をしたが、自分と同じ知的レベルの相手との会話はとてもいい刺激となってくれる。

こえーー！。八本指対策のついでとして手紙で『人を思いやろう』『好きな人には優しくしよう』などと精一杯の情操教育を施していますが、実際に会わないと成果が不明で恐ろしいですね。樽一杯のワインに泥水を入れたらそれは泥水だと言いますが、逆に泥水をワインにするにはどれだけワインを注ぎ込めばいいんですかね……？

／「……報告は以上。詳しい事はここに書いてある」

そう言つて渡された資料をあなたは詳しく読み込んでいく。イジャニーヤは想像以上の働きをしてくれた。あなた一人ではどこかで八本指に気付かれてしまつていただ

ろう。

倍速中に八本指に関する情報がほぼ集め終わりましたね。今回のイジヤニーヤは有能なようで良かつたです。ホモ君の職業であるノーブルは人を使うと相手のステータスに補正があるので、それのおかげかもしません。

さて、集めてもらつた情報はイズエルク領の八本指と貴族の取引に関するものですね。これだけでも十分な証拠ですが、ホモ君の明晰な頭脳であれば金や情報の流れから八本指と繋がっている他の貴族も炙り出すことができます。これは貴重な情報なので後々使いましょう。

そして尊敬していた父親が汚職クソ野郎だつたことが分かつたホモ君はショックでいっぱいですね。無意識に見ないふりをしてきたのも限界なようです。ほんとは最初から分かつてたんだルルオ!? しゅーくせい！ しゅーくせい！ さつさと肅清！ しばくぞ！（騒音走者）

✓イジヤニーヤに集めてもらつた情報をあなたは何度も精査したが、結論は同じだつた。あなたの父親、レイモンド・モルデラ・デイル・イズエルクがこのイズエルクに蔓延る汚職の中心だと、調査した全ての証拠がそう示している。

✓尊敬していた父親。いつも厳しくも優しかった父親。周りから隔絶された頭脳を持つあなたが健やかに成長できたのは、ひとえに家族の温かい愛情があつたからだ。そん

な彼が、裏では八本指と手を組んでいた？　あなたにとつて目標でもあつた父親の不祥事に、あなたは精神の平衡を失つた。

ああ、ホモ君の曇り顔かわいいんじやあ、必死に何かの間違いだと証明しようととしても無駄で可愛いね。お前も覚悟決めろ？

八本指がつけていた裏帳簿、イズエルク家と八本指の取引が記された証文、父親の部屋から見つかった大量の汚職の記録…。証拠は十分に集まっている。これらを集め王都へ告発すれば、確実にあなたの父親は捕まるだろう。そしてそれは、イズエルク領に蔓延る八本指を一掃することにもつながる。

しかし、そこであなたの思考が止まる。王国法に照らし合わせて、父の行為は国への背信行為にあたる重罪だ。イズエルク家の権力では彼を守ることが出来ない。他の貴族たちへの見せしめの意味でも、父は確実に火刑に処され、殺されてしまうだろう。

汚職に手を染めながら、それでもあなたに全幅の愛情を注いでくれた父。父のような貴族になりたいと思い、あなたは今まで努力してきたのだ。そんな彼を、自分の手で処刑台に送る。それは正しい事だろうか？　そんな訳がない。しかし父を見逃せば、八本指によつて苦しめられる全ての領民を見捨てる事となるのだ。

決断を下すことが恐ろしい。正しさを信仰していたあなたは今、その正しさによつてこれ以上なく苦しめられていた。

＼あなたの手が、震えながら着火の魔道具へとのびる。あなたは――。

↓全ての証拠を焼き払つた

↓父を告発することを決めた

はい、選択肢が入りましたね。ここは滅茶苦茶重要な分岐点です。

ここで下を選びホモ君の父親をぶちぶちにぶち殺すことで、ホモ君はブレーキが壊れてラナーと同じ精神的な異形種の境地に至ることが出来ます。ラナーがクライムのために全てを裏切ったように、ホモ君は正しさの為に全てを犠牲にするスーパーマシーンホモ君として完成するわけですね。王国救済がまともな精神で出来るわけないだろ！さつさとお前も正義の化身になるんだよ！

＼あなたは魔道具を掴み、部屋の隅へ投げ捨てようとする――

――急に、あなたの手を誰かが掴んだ。

フアツ！？

＼「お返事がないので、勝手に失礼しました。許してくださいね？」

そう言つて、あなたの友人であるラナー王女は宝石のような笑顔をうかべた。

＼なぜ、彼女がここにいるのだろう。うまく回らない頭でそう尋ねると、彼女は再び

嬉しそうに笑つてこう言つた。

「私だつたらこのくらいの期間で証拠を集め終わると思いまして。それに、あなたに教えてもらつたことを実践したいと思つたんです」

自分が教えたこと…？ そう疑問に思つてゐる自分を嬉しそうに眺めて彼女はこう続けた。

「うふふつ……。初めて会つた時は自信満々でしたけど、そのような顔もなさるのですね？ 酷い顔をしてらつしやいますよ。 私で良ければ、話してみてくださいませんか？」

ファファファのファ!? 止めろ、知らないイベントを起こすのはヤメロー！ ふざけるな！ ふざけるなあつ！ 馬鹿野郎!!（切嗣感）

／＼彼女の笑顔に誘導され、まるで懺悔するようにななたはラナーに全てを話した。 尊敬していた父親が、裏では民を苦しめていたこと。自分は父と正義のどちらを選ぶか迷い、最後には正しさを選ぼうとしていたこと。

そんなあなたの話を聞き終えたラナーは、につこりと笑つてこう言つた。

「苦渋の決断をしたのですね。…さぞかし辛かつたことでしょう。 私で良ければ、あなたに第三の選択肢を与えてあげられますよ？」

第三の選択肢？ ラナーが発した意外な言葉に、あなたの頭脳が慌ただしく回転し始める。

「私の屋敷で、あなたの父親をかくまつてあげます。汚職の責任を取らせて、あなたが独

断で放逐したということにしましよう。もちろん他の貴族は血眼で探すでしょうが、まさか王族の居住に踏み込むなんてことが出来るわけありません」

「確かに、それは名案の様に思えた。父親を殺すこともなく、八本指を退けることもできる。まさに一挙両得の提案だ。」

「しかし、それで得をするのは自分だけだ。彼女は罪を犯した貴族をかくまうという、特大の爆弾を抱えることとなる。彼女にはそんなことをする理由がまったく無い。」

「ふふふ。そんなの当然じゃないですか。……私、あなたと会うまではずっと王宮で一人ぼっちだつたんです。訳の分からぬことを言う不気味な子だつて周りから嫌われて。それでもあなたと出会つて、あなたに認めてもらつて、見える景色が変わつたんです。今私が幸せでいるのは、全部あなたのおかげなんですよ？ 最初に理由もなく助けてきたのはあなたの方じやないですか。ちょっとは私にも、あなたを助けさせてください。」

そう言つて彼女は微笑んだ。

ヤメロー！ ヤメロー！ ホモ君はここで正義マシーンとして完成するんだ！ 父

親を助けたら中途半端になつちやうだろうが！ こんな！ こんなもの！ うう…壊れちやつた…私の手作りチャート…。

✓ ラナーの提案に乗り、あなたはそのままラナーとその護衛達を連れて父のもとへ向かつた。

✓ 父は最初は八本指との繫がりを否定していたが、自分が集めた証拠を見せ、その上でラナー王女に保護してもらう予定であることを伝えると、大人しく汚職を認めた。

✓ 家督の相続を慌ただしくすませ、父は母を連れてイズエルクを去つた。監視も兼ねて、ラナーも自分の屋敷へ戻るようだ。

✓ 馬車を見送り、自分ひとりとなつた屋敷へと戻る。本当にこれで良かつたのだろうか…。手紙は書くとはいえ、家族との別れにあなたの心は深く沈んでいた。

✓ しかし貴方の胸には、父親が最後に言つた『お前は自慢の息子だよ』という言葉が温かく根付いていた……。

……（呆然）。

あつ、名誉値が入つてきてホモ君の肩書が『イズエルク家当主』に変わりました……。何だつたんでしょうか今のイベントは。悪い夢かな？

……とりあえず自分の主義として完走はします。全く未知のイベントだつたので、これがどういう条件で発生してどんな影響があるのか確かめないと次回のチャートに活かせませんからね（P D C Aサイクルを回す社畜の鑑）。

それにこれがガバだとはまだ決まっていません！ 走者の豪運によつて引いたレア

イベントで、タイムを縮めてくれる可能性だつてあります！ なあに、歴戦の走者である私の腕を信じてくださいよ！ 不測の事態があつてもオリチャ一なんてお手の物ですつて！（空元気）

ふう……。それではキリがいいので今回はここまでにしておきましょか。ついでに確実に助からないであろうホモ君の父親の冥福でも祈つておきましょう。それではさようなら、ご視聴ありがとうございました。

「ふふっ、うふふふふ……っ」

「ああ、すいません。そう怯えないでください。人に対して怒りを抱くのは初めてなので、上手くできないんです。ふふふふ、怒っているのに笑いが出るなんておかしいですね？」

「汚職？ 別にそんなことどうでもいいんですよ。私はね、あなたが彼の視線をずーーーーと独占していることが最初から気に入らなかつたんです」

「彼の黄金のような金髪も、サファイアのような眼も、私を暖めてくれる太陽のような笑顔も。全部私のものなんです。わかりますか？ あなたのものじゃないんですよ？」

「ふふつ、でも……。私、彼に色々なことを教えてもらつたんです。『好きな人には優しくすること』はもうやりましたから、今度は『人を思いやること』をしないとですね！」

「レイモンドさん？ あなたに余命を一ヶ月差し上げます」

「あなたは不幸な事にも、一ヶ月後に警備を潜り抜けた八本指によつて肅清されてします」

「ですからそれまでに、彼に沢山手紙を書いてあげてください。あなたの筆跡や文章をコピーして、あなたが死んだあとは私が書いてあげます」

「うふふつ、彼との文通が倍になつたわ……！ きっと悲しむだろう彼を思いやるつていう言い訳もついてきて、なんてお得なんでしょう！」

「本当にありがとうございます、レイモンドさん。せめて死ぬときは苦しまないようにしてあげますね？」

「返事はどうしましたか？ もつと爪を剥がされないとお返事できませんか」

「……はい、いいお返事です！ ああ、そうそう。手紙は検閲するので、余計なことは考えないようにしてくださいね？」

「はいっ、お利口！ うふふつ。一ヶ月間、精一杯おもてなししますね！」

「それでは、さよなら」

閑話

【イズエルク領の代官かく語りき】

最初に見たときは、『なんか知らんが変なガキが来た』程度の認識だった。

この国で幸せに暮らすためには、なにはなくともまず馬鹿じやなきやいけない。ちよつとでもマトモな頭を持つてりやあ、自分がいかに詰んでるかつてのを理解して生きていくなくなるからだ。

幸いにして俺はそれなりにバカでそれなりに優秀だったから、貧民出身でも要領よく商業ギルドの下つ端として適当に過ごすことが出来た。

凝り固まつた権力は腐敗を生む。このギルドのトップは何代も前からの世襲制で、どんなボンクラだつてハンコを押せさえすればギルド長になれる。んで、そんな無能がトップに立つてまともな事をする訳がないし、そんな奴の下にまともな奴が集まるわけもない。

俺が入つた時のギルドはまあ酷いもんだつた。親のコネだけで生きてるようなやつが若い女子職員にセクハラして、その下で俺みたいなチンピラあがりがヘラヘラ昼間つから酒を飲んでんのさ。誰も口に出さなかつたけど、八本指らしき奴が普通にギルド長

の部屋にいるのも見たぜ。

だけど、別に俺は何も思わなかつた。良い事したら良い事が返つてくるなんて、きようびガキでも思つてねえ。何十年後かには、この国は滅びて帝国に飲み込まれてるだろうが、だからつて俺には何の影響もない。年寄りになつても同じように、ヘラヘラ笑つて酒を飲むだけだ。

そんな風に諦観を貼り付けて生きてきたから、『領主の息子が視察に来る』なんて聞いた時も、床に転がつた酒瓶を片付けようとすら思わなかつたね。注意されても「あんたも一杯どうだい?」なんてかましてやるつもりだつた。

だから、まさかあんな怪物が来るなんて予想もしてなかつたんだ。

「父の名代で来ました。ホールド・モルデラ・デイル・イズエルクです。ここ案内をしてもらえますか?」

思わず背筋が伸びたね。そいつがギルドに現れた瞬間から、そこはもうギルドじやなくて奴のための劇場だつた。

普段威張り腐つてるコネ野郎も間抜け面晒して、「ああ」だの「うう」だの呻くだけになつてしまつたし、女子職員は地上の太陽みてえなそいつの顔から一ミリも目線を動か

さなくなつちまつた。

まあ、俺が言えた口じやないんだけどな。床に散らばつた酒瓶を慌てて搔き集めたし、よれた制服のシワを取らなかつたことを死ぬほど後悔した。

今やうめき声しか出せなくなつたコネ野郎が元々の案内役だつたんだろう、そいつはちよつと困惑したように眉を寄せて俺にこう言つた。

「困りましたね。そこのあなた、代わりに案内をお願いしていいですか？」

勘弁してくれつて思つたね。ここまで見た瞬間に『ああ、格が違う』なんて思わされたのは初めての経験だつたからだ。貴族つてのはみんなこんな感じなのか？ 正直もう帰つて寝てすべて忘れたかつたし、二度とこいつに会いたくないとすら思つた。

「畏まりました。わたくし、イズエルク領商業ギルド職員のトロントと申し上げます。どうぞよろしくお願ひいたします」

まあ、拒否できるわけもないんだが。ペラペラ回る口を持つて本当に良かつたぜ。

しかしこんなガキに何を案内すりやあいいんだ、こりやあガキのお使いのお手伝いかな？ なんて俺は困つたんだが、数十分後には全く逆の理由でもつと困ることになる。

視察なんて、普通ちよつとお偉いさんと挨拶して飲みに行つて終わりだ。だというのに、そいつはギルドのありとあらゆる所に首を突つ込み、少しでも非効率なところがあれば積極的に改善しようとした。勘弁してほしかつたぜ。そんなもん皆気付いてて、で

もどうしようもねえから諦めてんだよ。そう言えればどれほど楽だつたろうか。

「ありがとうございました。また明日もよろしくお願ひしますね」

聞き間違いだよな？ 明日も来るつて言つたか？ いやいやまさか、この年の貴族はクズな遊びに手を染めるばかりのはずだ、（娼館選びを）よろしくおねがいしますの聞き違いだろう。

「こんにちは、トロントさん。今日もよろしくお願ひしますね？」

間違いじやなかつた。クソが。しかもこいつはそれから毎日來た。毎日だ。今までぬるま湯だつた職場に、貴族のガキが毎日来て、毎日俺に質問してきやがる。

しかも、こいつはこれ以上ないつてほどに有能だつた。初日の頃は誰にでも言えるようなことしか言わなかつたくせに、来るごとに指摘が冴えていき、誰も思いつかなかつた改善案を出してくる。

居心地が悪かつた。ここはクズの俺にふさわしい掃きだめで、誰も彼も死んだ目をしていたはずだつたんだ。

それがあのガキが来てからどうだ？ ゴミと酒瓶でいっぱいだつた床はホコリ一つないほど綺麗になり、上司からのセクハラに耐えるだけだつた女子職員はいつあのガキが来てもいいようと嬉しそうに着飾つてる。前は審査に何時間もかかっていた書類は即ハンコ付きで返されるようになり、死んだ日仲間だつた同僚達はいまや働くことが

楽しくつて仕方がないつて感じだ。はつきり言つて、奴は侵略者だつた。ゆるやかな閉塞感に包まれていた安息の搖り籠を壊す、俺の敵だつた。

敵は、倒さなければいけない。

鬱屈した感情が爆発したのは、案内の途中の休憩時間だつた。

一度言つてしまえば口も滑らかになるものだ。立場の違いも忘れ、俺は奴に悪態の限りを尽くした。

「悪いがもう俺に関わらないでくれ。俺はもうギルドを辞める。あんたのことが嫌いだからだ」

「街であんたのこと皆が何て言つてるか知つてるかい？ 太陽の御子だつてよ。恥ずかしくないのか？ 俺なら恥ずかしい。とてもじやないが外を出歩けないね」

「どうせそのお綺麗なツラの裏ではどいつもこいつも見下してるんだろう？ 自分は特別で、周りとはちがうんだーつつってなあ」

「周りがいかに褒めそやそうが、あんたを心の底から嫌つている奴がここに一人いることをよく覚えとけよ。迷惑なんだよ。せつかく居心地のいい職場だつたのに、あんたが来てから皆熱に浮かされたようだ」

「どうせあんたを慕つてゐる奴も、あんたを不気味に思つていつかいなくなる。住む世界が違うんだ、太陽に近づきすぎた凡人は焼かれて死ぬだけなんだよ。その時に『ああ

僕は下賤の民と近づくべきじやなかつた』つてせいぜい後悔しろ』

こんな感じの事を、思いつくままに言つた。支離滅裂だつていい、とにかくこいつを傷つけたかつた。傷つけて距離を取りたかつた。これ以上こいつの近くにいて、自分に期待してしまうのが嫌だつた。良い生活ができるんじやないか、幸せになれるんじやないかつて期待するのが苦しかつたんだ。

奴は大の大人にすごまれてるつてのにも関わらず、ずっと笑顔だつた。それが死ぬほど癪に障つて、気づいた時には俺は奴の胸倉をつかみ上げていた。

「耳わりいのか!? 何黙つてやがる、なんか言つてみたらどうなんだ！ そんなに俺をバカにしてえのか!?」

「げふ……つ。いえ、すみません。嬉しかつたんです。あなたが初めて心から話してくれましたから」

は？ つて感じだよな。罵声を浴びせられて嬉しいだと？ 思わず力が抜けて胸倉から離した俺の手を、奴は掴んでこう言つた。

「ほら、こんなに近づいても焼けたりしませんよ。周りは色々と持ち上げてくれますが、僕なんて大したことありません。さつき言つたことは間違ひです。僕は太陽なんかじゃないし、あなただつて凡人なんかじやない」

「は……はあ!?」

「初めて僕がここに来た時のことを覚えてますか？あの時、ギルドの中であなたが一番僕の話を真面目に聞いてくれた。貴族で、調子に乗つて、大嫌いな僕の話を、だけどあなたは一度だつて馬鹿にしなかつた。知つてますよ？あなたが陰日向から女性職員を守ろうとしていたこと。僕を疎んで、馬鹿にしていた上司を説得してくれたこと。あなたは優秀で、優しくて、気高い人間です。だから、自分のことをそう嫌いにならないでください」

僕が悲しいです。そう言つて奴はにつこりと笑つた。街の異名がすとんと腑に落ちる、太陽のような笑顔だつた。

本当に、あの時来るのがこんな怪物だと知つていたら一も二もなくサボつていたのに。こいつに出会つたのは人生最悪の間違いだつた。限界だ。この引力から、もう逃げられない。

「それと、そんなに汚い言葉遣いはいけません。お嫁の貰い手がありませんよ？……ふふつ、さんざん悪口を言わされましたから、ちょっと仕返しです」

そう言つて、するりと手を放して奴は廊下を去つていつた。俺はただ茫然としてその背中を見送つていた。

それから、奴は二度とギルドに来なかつた。その代わり、どこそこの地主に輪作かなんかの交渉を行つたとか、人足を募つて下水道の整備をしたとか、そういう噂がど

んどん聞こえるようになつた。

俺は、まづきちんとした貴族の作法を勉強した。ぼさぼさの長髪を梳かし、いつも睨め付けているように見えるこの目つきも眼鏡で隠した。よれたボロ服ではなく、きちんとした礼服を初めて買った。

スラム上がりの荒れた女はいなくなつて、代官採用試験に挑む勤勉な女学生が生まれた。

「それでは、面接試験を始めます。呼ばれた方から別室へお入りください」

聞いた話では、どうもホールド家にも色々あつたらしい。あいつの父親はいなくなつて、今はあいつがホールド家の当主だそうだ。その余波で役人の数が足りなくなり、俺にチャンスが生まれたのだから嬉しい限りだ。

「よう天才。凡人を焼くことにそろそろ罪悪感を覚えてきたか？」

久しぶりにみるあいつは、昔よりもはるかに成長していくつも、どこかあの時より柔らかい雰囲気を纏うようになつっていた。太陽の輝きのような美貌がまずは困惑を浮かべ、そして次第に笑顔に変わっていく。

本人が何と言おうと、ホールド・モルデラ・デイル・イズエルクは地上の太陽だ。近づいた凡人は皆、焼かれると知つても離れられない運命にある。

「失礼な受験生ですね。ふふつ、失格にしますよ？」

——だつたら、せめて誰よりも近くに。

そう思いながら、俺はにやりと笑った。

「よう、俺だ。覚えてるか？ 嫁の貰い手に困つてな。ここで拾つてもらえるか？」

【イジャニーヤの暗殺者かく語りき】

暗殺者に思考はいらない。ただ命令を実行する機械であればいい。

私はそう教えられてきた。まつたくもつてその通りだと思う。迷いは遅れにつながり、恐れは敗北につながる。暗殺者はそれらすべてを超越し、ただ相手に恐怖を与えるだけの存在にならなくてはならない。

うむ、かつこよくて良い教えた。自分はそれを完璧に守つていると自負している。ただ、それはそれとして。

依頼主の望みに応えるために、暗殺者は全力を尽くすべきだ。口に出さない種々の望みを叶えてこそ一流の証である。そのためには多少上記の教えを破つても、まあ仕方ないと言える。

「あの……。庄がすごいんですけど」

部屋の隅でずっと依頼主を眺めていても、それもまた一流の証なのである。そういうことなのだ。

「暗殺者に思考は必要ない。私はただ護衛を務めて居るだけ。庄はホーリド様の気のせい」

八本指の捜査を終えて、自分はこの少年に雇われていた。あの時の自分はのりにのつっていたため、あつという間に仕事を完了させることができた。その辣腕に感服したのだろう、少年が自分の護衛兼子飼いの諜報員として雇いたいと交渉してきたのだ。正確に言えば自分から交渉を持ちかけた気もするが、それは彼の熱い目線がそうしてくれと訴えかけていたからだ。暗殺者に思考は必要ない。

「たしか八本指がまた入り込んでいいのかの調査をお願いしていましたよね。もう終わつたんですか？」

「当然。すでに担当者に報告書も上げてある」

不思議な話だが、この少年のもとで様々な依頼をこなす内に技のキレが上がってきた気がする。これもまた一流の証……？まあとにかく、自分は仕事に手抜かりするような性格ではない。綿密な報連相は当たり前のことだ。

「うーん……優秀は優秀なんだよなあ……これで他の領の偵察にも行つてくれたら文句

なしなんですけどね？」

「それは無理。あなたの周りの警備ができなくなる」

「寝る時まで一緒にいる必要はないと思りますけどね……！」

そう言つて雇い主がかぶりを振る。彼は優秀だが、自分の進言を時々聞き入れてくれないのが玉に瑕だ。寝る時こそ生物が最も危険な時間帯ではないか。だからこそ自分も同じベッドに入つて警護するべきなのだが、断固として断られてしまった。何とか寝室に待機することは呑ませたが、それもどうやら不満なようらしい。

やれやれ。しかしあがままを言う依頼主の要望に応えるのもまた一流の暗殺者の証。今のところは我慢しておこう。

「僕、あなたの言う『暗殺者に思考はいらない』ほど薄っぺらな言葉を聞いたことがありますせんよ」

「心外。私に意思はない。ただ依頼人の命令に従う機械になんてことを言う」

自分は依頼人の深層心理に寄り添つてゐるだけだというのに。

「私はあなたのメンタルケアを行う必要性を感じている。父親の悪事を告発するのは大きな負担だったはず」

空気が少し張り詰めたのが分かつた。

自分が上げた報告を読んだホーリド様はしばらく酷く苦しんでいた。まだ幼かつた

彼にとつて、父親が汚職に手を染めているというだけでショックだつたはずだ。そしてそれを自分が裁かなければいけないとなればなおさら。

自分はその場にいなかつたため詳しいことは知らないが、王都の協力者のおかげで命だけは助けられたのはきっと幸運だつたのだろう。

「……心配してくれているんですね」

「別に、そんなことは無い。私に意思はない」

自分に言い聞かせるようにそう言い、さらに続ける。

「ただ。護衛とは、物理的なものだけではない。傷ついた主の心を癒すのも、一流の暗殺者の務めだと思つただけ」

「ふふっ……なんですか、それ。前から思つてましたけど、一流つて言いたいだけじゃないですか？」

笑顔を見せてくれた。可愛い。ちなみに今の可愛いというのは恋愛感情ではなく慈しみの心から来るものなので誤解しないように。早口になんてなつてない。

「確かに、最初は辛かつたですよ？ 父さんのことは大好きでしたから。一瞬、自分が揉み消せばなんて考えたりもしました」

「……無理もない」

「きっと、あれは何かの分岐点だつたのだと思います。正義を捨てるか、正義に全てを捧

げるか。きっとどちらの道を選んでも、僕は二度と自分のことを好きになれなかつたと思ひます」

「今は、違うの？」

「ええ。少し考え方を変えたんです。今まで、正しく生きれば幸せになれると思つていました。僕たちの頭上には絶対的な正義が太陽のように浮かんでいて、それに従つて生きるのが正しいことだつて思つてたんです。でも違うんですよね。何が正しいかなんて、みんなで話し合わなきや決められないんです。僕はこれから、一生かけて『皆が幸せになれる正義』を探していくんですよ」

そう語る彼の顔は、まだ幼い少年のものとは思えないほど成熟していて、思わず私は言葉を失つてしまつた。

——きっとホールド様は、将来とんでもない人物になる。それを一番近くで支える事こそ、自分の役目な様に思えた。そう、きっとそれが一流の暗殺者の証というやつだ。

「……よし、仕事も終わつたしご飯にしましようか」「了解した。毒見なら任せてほしい」

「嫌ですよあなたヲ割もつてくんですから……！」

【イズエルク領元領主かく語りき】

どこから間違えたのかと言えば、きっと最初からとしか言いようがない。

青き血をもつ者としての責務。ノブレス・オブリージュ。そういういつたものに熱意を燃やしていた頃が遠い昔のようだつた。

厳しい教育と悪い遊びの誘惑に耐え、王国法の判例を詰め込んだあの日。煩雜なマナーが何度もやつても覚えられず、手に鞭を受けて泣きながら奮闘したあの日。尊敬する父から家督を受け継ぎ、イズエルク領をさらに発展させていこうと意気込んだあの日。その全てが無駄だつた。私は周囲からの期待も、親からの愛情も裏切つてしまつた。全く貴族としての資質を持たない落ちこぼれだつたのだ。

的外れな施策を行い、そのたびに失望のまなざしを向けられる日々。こんなはずじゃなかつたという思いは日々膨らんでいき、いつしか私には諦念がこびりついていた。

そんな時、ある商人が取引を持ち掛けてきた。自分にかかるれば、領地をもつと発展させる有能な人材を紹介できると持ち掛けってきたのだ。疲れ切つっていた私はその話に乗

り、紹介された人材を役人として迎え入れた。

この時に死んでいればよかつた。この時に自殺していれば、その後の身を焦がすような苦しみを味わわなくて済んだというのに。

紹介された人材はみな優秀なものばかりで、優れた政策を次々と打ち出していった。領地の中での私の評判はみるみる回復し、私は有頂天になつた。

みたか！ これが私の力だ！ 貴族に必要なのは頭脳ではない、優秀な人材を見つけて任せる力なのだ！ そう驕る私のなんと滑稽な事か。

彼らが皆八本指の下部組織であり、政策はすべて自作自演という事に気付いたのは、全てが手遅れになつてからだつた。

すでに彼らはこの街に根を張つており、そして自分は逆らう気力も起こらないほど徹底的に懷柔されていた。

一度自分はとことん失敗しているのだ。無能な貴族である私が、王国最大の闇組織である彼らを追い出す？ いつたいどうやつて。それに追い出した後、どうやつて統治していくつもりなのだ。それが出来なかつたから八本指に付け込まれたというのに。夢を見るのは寝る時だけにしておけ。彼らを放つておけばほら、こんなにも旨い蜜を吸わせてくれる……。

死ながら、苦しみながら生きているようだつた。

家族といふ時間だけ、自分の罪深さを忘れられた。私の最愛の家族。遠縁の親戚からとつた氣立てのいい妻に、初めてできた聰明な息子。息子のホールドの頭の良さはすさまじく、私が長年かけて身につけたことをたつたの半年でものにしていった。

全く嫉妬しない自分に、逆に驚いた。息子がどんどん成長していくのが素直に嬉しかった。彼ならきっと、私のように八本指につけ込まれるようなこともない。安心して自分の後を任せられる、素晴らしい息子だと思った。不器用な自分なりに、全力で愛情を注いだ。

ああ、自分は最初から間違えていた愚か者だった。

家督を継ぐべきではなかつた。商人の甘言に乗せられるべきではなかつた。真に息子のことを考えるなら、八本指に気づいた時点で何らかの対策を考えるべきだつた。家族の思い出をもつと作つておくべきだつた。あの子と、父親らしくキヤツチボールをしてあげればよかつたのだ。

自分は裁かれる。それは構わない。与えられる苦痛のすべてが、我々への罰に過ぎない。ただホールドよ、わが最愛の、今は遠くにいる息子よ。

願わくばもう一度、君にパパと呼んでほしかつたよ。

「あーあ、早くホールドも王宮に来ないでしようか？ ずっと領地にいたらつまんない

です！　あ、そうだ！　今度の手紙はそういう内容にしてくださいね？
たら……そうですね、一週間延ばしてあげましょう！」

もし来てくれ

第六話の裏技

強くなれる理由を知つて進むRTA、はーじまーるよー。

嫌な事件だつたね…。ガバが見つかつたんだろう？（富竹）いやー、前回は驚きの連続でしたね。『魔性の貌』の効果を甘く見ていました。推測する限り、きっとラナーちゃんの好感度を稼ぎすぎてしまつたのでしょうか。原作ではクライム君に向けられていた彼女の一途な愛情（婉曲表現）がホモ君に向けられてしまっています。非常に、非常に残念ですがもうこの先クライム君が登場することは無いと考えるべきでしょう。やばいですね。

クライム君という外付け制御装置を失つた彼女は生きる核地雷みたいなもんです。一応最高級ホモ君のおかげで歪みは抑えられているでしょうが、それも怪しいもんですね。これもうパンジヤンドラムだろ…。そんな彼女をどこまで制御できるかが私の腕の見せ所さんと言えるでしょうね。この後にメンヘラ骨も控えてるつてマジ？ 辞めたくないますよ部活（意味不明）。

／＼イズエルク領の新たな当主となつたあなたは、大規模な人材の入れ替えを行つた。八本指と繋がつていた者たちを降格させ、民間試験から役人を自ら選んで穴埋めとし

た。幼い自分が主導した急激な改革だが、領民たちの反発は意外にも少なかつた。今までの活動が実を結んだのだろうか。

✓ 父のことを思い出す。彼は悪人ではない、ただ弱いだけだった。心の弱さを八本指に付け込まれたのだ。八本指と繫がっていた役人たちをあなたは集め、もう一度自分の下で働いてほしいと頭を下げた。一部の者は自ら辞めていったが、多くの人は再び熱意を取り戻して働いているようだ。

ケツ……。正義マシーンとして完成したホモ君なら、汚職した奴を全員処刑して財産没収できただんですけどね。今のホモ君ではその選択肢が出て来ませんでした。ペツ、甘ちゃんがよ。カルマ値が高いと人々に信頼されやすくなりますが、このようにあくどい行動が取れなくなります。父親を殺して下がつたカルマでちょうど0、完全な中立になるように調整していたんですが無駄になりましたね。

✓ 今まで父がやつていた他の貴族との折衝も、これからは自分ひとりでやつていかねばならない。あなたはイズエルク領当主としての自覚を新たにした。

✓ 『外交』コマンドが解放された！

✓ 『接触する』コマンドで出会える人物が増加した！

✓ あなたの名声は多くの人々の興味をよぶ……

✓ 『接触する』コマンドで出会える人物がさらに増加した！

イズエルク領を手にしたことでコマンドが解放されましたね。これによつて他領と交易したり、一定の立場が無いと会えない派閥の長と出会うことが出来るようになります。パーティー？ 参加しませんよあんなもん。八本指に目を付けられるリスクはある上に大して名誉値も稼げないカスイベです。パリピと親しくなつてもいい事なんてありません。まだ幼いホモ君はいいカモに見えるので大量にパーティーの誘いが届いていますが、全部燃やしておきましょう。

それではこれから行動を説明していきましょう。イズエルク領内で色々するのはもう終わり、今回からは王国を改革するために様々な陣営に接触していきましょう。

イズエルク領を掌握して地盤は確立されました。次は今まで稼いだ名誉値をじやんじやん利用して王国を復活させる準備をしていきます。名誉値が一定以上ないと権力者には会えませんからね。仕方ないね。

まず王国の現状を説明しましようか。実は王国つてポテンシャルだけなら諸外国一なんですよね。土地は豊かで侵攻してくる亜人たちもいないという素晴らしい立地に、膨大な徵兵を可能にする国民の数。本当なら隣の帝国にジワジワ追い詰められてるのがおかしいレベルなんですよ。

いやあなんでこんなにカスなのかと言われれば、それはやはり上層部が無能ぞろいだからとしか言いようがありません。全員選民意識に脳が凝り固まつた頭スポンジども

です。彼らが重税を課して八本指にジャンジャカ資金をつぎ込んでいるため、王国は貧しく人材もろくに育たない訳ですね。眠れる獅子なんて良いもんじやありません、もう内臓全部ぶちまけちゃってる獅子つて感じです。

そんな王国をどうやつて救うのか？ 今にも死にそうなこの国家を救うには並大抵のことでは無理です。彼らは無能の中でもさらに質の悪い、歴史ある無能ですからね。革命によつて新王朝を打ち立てられればそれが一番いいのですが、今回の目的『救国の英雄』の称号はそれでは得られません。抜け道が無い事はないんですが、『救国の英雄』を得るにはエンディング時に王国が現在の形を保つていて必要があります。ではどうするのか。

ここは偉大なる骨、アインズ様の手法を真似しましよう。つまり――

✓ 父のように苦しんでいる人を助けたい。あなたは王国を救うため、今まで考えていた計画を実行に移すこととした。

✓ 最初に連絡を取る人物はもう決めている。エリアス・ブラント・デイル・レエブン侯。今や一大派閥の長となつた王国篡奪を目論む彼こそ、最初の交渉相手にふさわしい。

――王国も法國も全部巻き込んだ超巨大マツチポンプです。

「君の名前は良く知っているよ、ホーレド卿。わずか7歳で父親の不正を暴き、イズエルク領の当主となつた若き神童。君から手紙をくれて嬉しかつたね、君とはゆっくり話したいと思つていたんだ」

優雅に椅子に腰かけながらそう語る姿は、自分の能力に裏打ちされた絶対的な自信に満ちていた。レエブン侯。おそらく王国で最も優秀な貴族の一人だ。

レエブン侯！　まだ息子が産まれてないから野心バリバリなレエブン侯じやないか！

彼は王国内N.O. 1の貴族、レエブン侯です。王国篡奪の野望に燃えているため大変手を組みやすく、またあと8年後には息子が産まれて超安定志向の子煩惱になつてくれると大変扱いやすいキャラです。骨の髓までしゃぶらせてもらいましょう。

ラナーほどではないが、彼との会話もまた打てば響く楽しいものだつた。お互いに核心の縁を撫でるような会話を続けたあと、ついに彼が切り込んできた。

「イズエルク領は今や周辺貴族からただのカモとしか思われていない。幼い領主によく肥えた領地。格好の獲物だ。君もそれが分かつてゐるね？　私のもとに来た選択は正しいよ。――私の派閥に入りなさい。私は君の能力を買つてゐる。厚遇を約束

しようじやないか』

うーんこの裏め殺しムーブ……。口ではなんだかんだ言つても、確実に下に見られますね。これはいけません。今のホモ君は王国を救うために燃えているのです。派閥闘争に身を投じている場合じゃありません。

＼あなたは持ち込んだ鞄から一束の書類を取り出して、彼に見せた。エ・レエブルで行われた様々な犯罪行為の記録がそこには記されている。イジヤニーヤの彼女に他領への偵察をさせるのは非常に骨が折れた。

ここは彼の犯罪すれすれの取引記録を見せてやりましょう。交渉の場で一発かますのは基本つて古事記にも書いてありますからね。オラツくらえつ！

＼「ほう、私の部下がこんな汚職に手を染めていたとはね……。残念だよ。良い事を教えてくれてありがとう。お返しに私も何か情報を差し上げようか。そうだね、君の父親がどこに逃亡したのか知りたくはないかい？」

うげーーっ、『お前も父親かくまつてるやろ知つとんぞオラ』とカウンター食らいました。だから殺しとけって言つたろうが！　あんなやつ身内の恥ですよ恥！　ま、まあいいでしよう。これで百戦錬磨のレエブン侯にマウント取れるなんてはなから思つてしません。これはただの有能アピールです。向こうにも自分の意図は伝わつているでしょう。

「張り詰めた空気を溶かすように、レエブン侯はふつと笑つて言つた。

「なんてね、冗談さ。王族に楯突くのは私だつて怖い。侮つていたつもには無かつたが、君は随分優秀な諜報員を雇つているらしいね。……それで？ わざわざ私の情報を集めて、どんな話をしたかつたのかな」

「少しさは自分のことを認めてもらえたのだろうか。不敵に笑うレエブン侯はどこか楽しそうだつた。

あなたは意を決して、彼に『ラナーの派閥に入つてほしい』と言つた。

目の前の相手を見据えながら、私は獰猛な笑いを抑えきれなかつた。ホールド卿との会話は実にストレスが掛からない楽しいもので、彼の知性が噂通りのものだという事がよく分かつた。私の弱みを堂々と握ろうとする胆力も良い。さらに父親という致命的な弱点を抱えているとなれば部下として申し分なしだ。

「ほう、ラナー様の派閥？ しかし言つては悪いが、彼女はスペアのスペア、派閥と言え

「ものは無かつたはずだが？」

「ええ、その通りです。だから僕と貴方で新しくつくるんですよ」

彼からの提案を受けて考え込む。ラナー王女？　あの美しいだけのお飾りにつくメリットが全くないよう思える。……話の筋が見えないな。会話の主導権は渡さないようにしなければ。

「私にそんな沈む船に乗れと？　貴族閥に属する人間に對しての言動とは思えないな」
彼女に惚れでもしたか。欲望を制御できない人間はどんなに能力が高くても二流だ。彼もまたその一人だという事だろうか。そう残念に思っていた私の頭は、次の瞬間凍り付いた。

「あなたの目的にも関わる話です。王座を狙っているのでしょうか？」

私の秘めたる野望。もつとも優れた貴族である私が、玉座を奪うという大それた欲望。それは派閥の誰にも言つていなかつたはずだ。ましてや、つい半年前に当主になつたようなガキに。……これは、話次第では生かしてはおけないな。妖しい魅力を放つ少年は私の後ろをちらと見てこう続けた。

「……先は、一人じゃないと恥ずかしくて話せません。彼には席を外してもらえますか？」

「……ああ、もちろんだとも」

隠し部屋に潜ませていた子飼いの元冒険者に『隙を見て殺せ』と指示を出そうとして、何の反応も返つてこないことに気づく。優秀なレンジャーだったはずの彼はすでに部屋のどこにもいなくなっていた。ホールドによつて排除された、と考えるべきだろう。今のはそれを教えるためにわざと言つたのか。随分優秀な人材が手元にいるようだ。白々しくお礼を言う彼の顔を睨みつける。

「優秀な配下だね。大事にするといい」

「はは……時々言うことを聞かなくて困つてるんですけどね」

「それで？　話の続きだ。ラナー王女の派閥に入つたらなにか良い事があるのかい？」

ホールド家の特産品がついてくるのかな？」

つくづく、こんな時に自分の本性と言うものを実感する。楽しくて仕方がない。目の前にいるのは怪物だ。彼をどんな風に打ち倒すか、もしくは利用するかを考えるだけで笑みがこぼれてくる。どうも私は乗り越える壁が高ければ高いほど快感を得る人種らしい。

「僕が彼女を推す理由は単純に、彼女が今の王族の中でも最も王の資質があるからです。今は信じられないかもしませんが、きっとすぐに分かつてもらえると思います」

「いつか利益ができるから、今投資しておけと？　詐欺師の論法だな」

「ふふっ、だとしたら随分優しい詐欺師ですね。手付金としてこんなものまで差し上げ

るんですから」

「そう言つて彼はドサドサと大量の紙束を置いた。
 「あなたの敵対派閥の後ろ暗い犯罪行為の記録です。読んでいいですよ？　まずは僕のこと信じて欲しいですから」

「そう言われるままに渡された資料をめくる。当然情報の裏取りは必要だが、どれも告発されれば処罰は免れないものばかりが証拠付きで載つていて。しかし、こんなものをどうやつて？　いくら優秀な諜報員がいたつて不可能だ。

「先にアタリをつけておけばいいんです。僕が流した情報の伝達速度、不自然な金の流れ……。そういうものを考えれば、自然とこの貴族はこんな悪事に手を染めているな、じやあきつと証拠はこのあたりに保管しているだろうなっていうのが分かるんですね。ラナーならもつとこういうのは上手いんですけどね、僕はいまいちです」

そういうつて照れるように少年は笑う。あまりに信じがたいが、真偽は後からでも確認できる。裏付けの算段を頭の中で整えながら、喜びを抑えて口を開く。

「……君が産まれたことは、私にとつてきつと一番の幸運だ。もちろんいいさ。これらの情報がもし本当であれば、私は六大貴族の一員にだってなれる。そうしたら君に協力すると約束しようじゃないか。ラナー王女を王にしたいのだろう？　私と君が組めば敵などいない。私達だけになつた王国で、どちらが王になるかの潰し合いをしようじや

ないか」

ああ、楽しみだ。心躍る敵がいることのなんと嬉しいことか。全身に霸気がみなぎる。それを笑顔でいなしながら、目の前の怪物は笑つて言つた。

「潰したりなんてしませんよ。僕としては、あなたには宰相あたりになつて欲しいんですけどから」

お優しく、なんとも傲慢なことを言う。彼もまた高揚しているのだろう、私に合わせてくれているのが分かる。ホールド・モルデラ・デイル・イズエルク。民衆いわく、太陽の御子。組むに値しないと判断すればさつさと殺してしまおう。そう考えながら、私と彼は心からの笑顔で握手を交わした。

第七話の裏技

お前と俺でダブルライダーだ：なRTA、はーじまーるよー。前回はレエブン侯とのファーストコミュニケーションの模様をお届けしました。野心家のレエブン侯は見て面白いですね。あと数年後には赤ちゃん言葉で喋りだすのを知つてると余計面白いです。

レエブン侯を味方につけることに成功し、あなたはラナーの屋敷でラナーとレエブン侯と会議を行つていた。

「ホールド君、確かに君の言つたとおりだ。ラナー王女と君が組んだこの派閥が、今王国内で最高の智を持つ派閥だろう。一枚噛ませてもらえて感謝するよ」

幼い頃のラナーの言葉をどこかで気にしていたレエブン侯は、少しの会話で彼女の持つ尋常ならざる智慧に気付いたようだ。しかし彼女の本当の姿に気付いてもなお「いつか打ち負かしてやろう」という覇氣を全身に纏う彼の精神もまた普通ではない。仲間に誘えて本当に良かったとあなたは思つた。

「さて、ではこれから作戦会議を始めるとしてどうか」

そういうつてレエブン侯はテーブルに羊皮紙を広げた――。

レエブン侯はさあ……敵が強いと嬉しくなる少年漫画の人？ 原作ではもう二度と見れない彼の輝いている姿を見て目頭が熱くなりますよ……。

レエブン侯がペラペラしやべつてる間に、私の華麗なる王国救済計画を説明していきましようか。法国も巻き込んだマツチポンプとは言いましたが、具体的にどうするかは解説していませんでしたからね。その前に今の王国の現状を説明する必要がある。少し長くなるぞ……（侍8感）。

王国には六大貴族と呼ばれる有力貴族たちがおり、彼らが王派閥と貴族派閥に分かれても飽きもせぬギスギスしたやり取りを繰り広げています。みんな喧嘩はやめよう！ ラブアンドピース！（閑廷おじさん）

じやあ貴族派閥を倒せば良いのか？と思われるかもしれません、王派閥もなかなかの屑ぞろい。なんと王派閥の一人であるブルムラシュー侯は王国を裏切つて帝国に情報を売り飛ばしています。あーもうめちゃくちゃだよ。

さらに次期王の有力候補には第一王子のバルブロと第二王子のザナックがおり、誰が誰を支持しているかとか結構めんどくさいのですが……。まあ大体貴族派閥がバルブロを、王派閥がザナックを支持していると思っていただけたら大丈夫です。

では以上のことを踏まえてどうするか。簡単です。ゴミ掃除をしたいなら、まずは一

か所にまとめてから。これからホモ君には貴族派閥、ラナー王女には第二王子のザナック派閥にそれぞれ取り入ってもらいましょう。レエブン侯には原作通り蝙蝠として表向きは貴族派閥、裏では王派閥といった両派閥のバランサーになつてもらいます。

全員の能力は折り紙つきですから、こうすると数年後には王国中の全てのトップを独占することが出来るわけですね。そうなれば後は簡単。ホモ君が貴族派閥を主導してクーデターを起こしましよう。ついでに王派閥の屑貴族も何人か誘つておけば安心です。そうしてホモ君により引き起こされたクーデターを、ラナー王女率いる王派閥が打ち倒すわけです。ここで法国の力も借りて劇的勝利をおさめねばなお良しですね。

そうするとどうなるか？ クーデターを起こして負けたとなれば、負けた側が無事で済むわけがありません。晴れて貴族派閥は解体され、やつと王国が一つの勢力の下でまとまることが出来るようになるわけです。ちゃんと負け犬の貴族派閥は直前で裏切つときましょ（人間の屑）。

王国全てを巻き込んだ盛大なマッチポンプですが、ここまでしてやつと国としてはスタートラインに立つたようなもんですからね。王と貴族の力が5：5とかお前精神状態おかしいよ……。

あとはナザリックが来るまでの時間でひたすら富国強兵に努めましょう。この際に法国の力も借りとくといい感じです。

ではそのような事を一人に話しましようか。ただホモ君視点ではまだ法国のことなんて知る由もないのに、今の時点では『とりあえず全員が派閥のトップになつて、王国の動きを自由に制御できるようになろう』といった感じです。字面にするとすぐえ事言つてますねこれ……。

「あなたはラナー王女とレエブン侯に自分の考えを話した。武力に乏しいあなた達が、自ら派閥を立ち上げるのは難しい。ならば、既に今ある派閥を利用することはできないだろうか？」

「クククッ、無茶をいうものだ。我々だけで王国を操り人形にしてしまおうと言うのか？　若者の戯言、白痴の夢……と言いたいところだが、確かに私や君たちなら出来るだろう」

「むう……私は不満ですよ、ホールド。貴族派閥はレエブン侯に任せて、私達二人で王派閥ではいけませんか？」

ラナーが可愛らしく頬を膨らます。残念ながら貴族と王派閥のバランスを保つ役は必要不可欠で、それは長年政治に親しんできたレエブン侯が最も適任だろう。王族の一員であり、すでに実質的な王派閥の一員とみなされているラナーが貴族派閥に入るのも難しい。これが最も適切な役割分担であった。

「それに君たち二人が王派閥になれば、王国統一後の王は決まつたようなものではない

か。その様な条件を私が飲むと思つたかね？」

レエブン侯が慄然とした表情でそう語り、三人で笑い合う。彼の中ではあなたとラナーは仲間であると同時に将来的な敵なのだ。あなたも出来ればラナーに王になつて欲しいと思っているので、その認識は間違つていないが。

なんでしょうね、このギスギスしてゐるのかほのぼのしてゐるのか分からぬ感じ……。だめだ：こんなことしてたら頭おかしくなる……！（コベニちゃん感）みんなも世纪の怪作チエンソーマンを読もう！

それではここからは少数精銳のラナー派閥は解散し、それぞれが単独行動に移ります。特大の爆弾であるラナーが爆発しないようちよくちよく集まつて会議したり手紙を出し合つたりはしますが、あまり大つびらに会うことは出来ないです。それぞれが派閥のトップになるまでしばしの別れです。二年後に!! シャボンディ諸島で!!!

／＼そしてあなたは貴族派閥に取り入り、成り上がつていくための工作を始めた。複雑怪奇な政治の世界に、ついに本格的に分け入つていくのだ。

／＼今あなたの名誉値なら、たいていの相手には出会うことができそうだ……！

／＼最もあなたの目的に適している者は誰か。それを考え、あなたは貴族派閥の筆頭貴族、ボウロロープ侯へ面会を求める手紙を書くことにした……。

貴族派閥へ殴り込みをかけに行きますよー行く行く。基本的に彼らは脳が死んでる

ので、いわゆるキヤバ嬢のさしすせそを言つておけば仲良くなれる（都合の）いい生き物です。さつさと取り入つて、貴族派閥のトップであるボウロロープ侯とコミュを築いていきましょう。本命はこの後、名誉値を一定以上稼ぐことで発生する『法国からの引き抜き工作』です。名誉値は領地を改善することでも得られます、貴族界で名を上げると大量の名誉値が手に入ります。目標の値まで一気に上げていきましょう。

きり良く終わったので今回はここまで。次回は法國が早く来てくれるることを祈りながらのホモ君の華麗なる政治界模様をお届けしましょう。ご視聴ありがとうございました。

第八話の裏技

生き残るのはこの世の『真実』だけだ：なRTA、はじまーるよー。

前回は我らがラナー派閥の決起集会の模様をお届けしました。今回は貴族派閥に取り入つてどんどん名を売りつつ、法国が早く接触してくれるようアピールしていきましょう。

✓あなたはレエブン侯の口利きで、ボウロロープ侯が主催するパーティーに参加していた。

豪奢な会場の中、着飾った貴族たちが自分にチラチラと目線を向けているのが見える。あなたは当主となつたばかりであり、こういったパーティーに参加するのは初めてだ。周りの貴族に值踏みされるのを感じる。

✓あなたは既に領地を見事に治めた実績を持つている……！

✓周りの目線はあなたを称賛するもの、何とかして自派閥に取り込もうとするもので一杯だ！

貴族界のパーティーは闇。これだけははつきりと真実を伝えたかった。

ここまで稼いできた実績のおかげで、いきなり子供がパーティーに参加しても誰もホ

モ君を侮つたりなんかしません。様々な貴族が自分の派閥に入らないかとモーションをかけてきますね。何だお前!?

まあホモ君の魅力と頭脳ならどうとでもなります。適当に周りをさばいて、本命の到着を待ちましょう。

「やあ、ホールド君。パーティーは楽しんでくれていいかね?」

周囲との歓談が一区切りついた頃、厳めしい顔をした大柄な男性があなたに声をかけてきた。

前線を退き身体は衰えたが、それでも今なお鋭い眼差しや声の張りに戦士の名残が窺える。彼こそ貴族派閥のトップであるボウロロープ侯であり、あなたが最終的に取り入るべき相手だ。

来ましたねこのガチムチのホモが: (風評被害)。

彼こそがこのゲーム屈指のイケオジ枠、ボウロロープ侯です。原作ではアイinz様が召喚した黒山羊でペツチヤンコにされてしまつた事しか見せ場がない、大変可愛そうなキヤラですね。

彼に気に入られる為にはどうすればいいか解説しましょう。

貴族派閥とか言う無能共のトップである彼ですが、実際の所指揮官としてみればそこそこ有能なんですよね。仮に彼が王国最強の戦士、ガゼフ・ストロノーフと同じ部隊を

指揮したとして、恐らくボウロロープ侯の方が勝つでしょう。それくらい指揮官としての腕前は卓越してます。

ですが長所は短所と紙一重。

軍事に傾倒しすぎるあまり、それ以外を軽視しがちなのが彼の最大の無能ポイントです。軍部至上主義の老害と言えばわかりやすいでしょうか。彼に気に入られる為には、いくら内政で成果を上げても意味がありません。彼の好きな軍事方面から攻めていきましょう。

✓あなたはボウロロープ侯と戦術に関する談義で盛り上がった。

ボウロロープ侯は魔術師より戦士に重きをおいた考えのようだ。野戦において、詠唱が必要な魔術師は精々一発しか魔法を放つことが出来ない。それならば騎兵がそれを耐えられるよう教練し、かかるのちに必殺の突撃チャージをぶつかませばよい、という彼の熱い語りをあなたは辛抱強く聞いた。

まるでキャバ嬢相手にいい気になつて熱演するジジイのようだ……（直喩）。

彼の思想の根本には魔法への無理解と、今までそれで戦果を上げてきた過去への執着がこびりついています。一朝一夕にどうにかなるものではありません。ここは適当にうなずいておいて、たまに鋭い一言を放つて喜ばせておきましょう。あつという間にホモ君を気に入ってくれます。

「はっはっは！ 王国きつての才児と聞いてはいたが、全くもつて予想以上だ！ 君は実に見込みがある！」

そう言つてボウロロープ侯は豪快に笑つてみせた。第一印象は悪くないようだ……。良し（ベネ）。ファーストコミュニケーションは完璧ですね。戦術に明るいとの印象も与えられたのでなお良しです。

これからはボウロロープ侯率いる貴族派閥に入り、彼らと外交を重ねて仲を深めていくことになります。特にボウロロープ侯は軍事に関しては明るいので、有能さを見せつけてやれば帝国との戦争で彼の部隊の指揮を任せされることだってあります。ぜひそこまで信頼されたいものですね。

「初めてのパーティーは非常に満足のいく結果となつた。あなたはこれからどうやつて彼らの中核へ取り入つていくか考えながら、パーティー会場を後にした……。

欲望渦巻く貴族社会に順応していくことで、ホモ君のカルマも少し下がつてきましたね。ガバのリカリードが順調で嬉しい限りです。さつさとカルマを0にして善にも惡にもよらない完成された人間になるんだよ、おうあくしろよ。本当はもつと早くにこうなつてくれる予定だつたんですが……まま、いいでしよう。この世界、善良でいて得することなんか数えるほどしかありません。やつとホモ君も清濁併せ呑む覚悟が育つてきているようで嬉しいですね（親目線）。

さて、その持ち前の魅力で貴族派閥に食い込んだホモ君ですが、しかしボウロロープ侯はいわば前哨戦。真に大変なのはここからです。

なんとここからは屈指のリセポイント、秘密主義極まる近隣最強国家法国の特殊部隊が接触してくれるのを待つお祈りタイムが発生します。ふざけるな！（衛宮切嗣）

原作未読兄貴たちの為にご説明いたしますと、法国と言うのは周辺国家最強の戦力を擁する覇権国家であり、実は最弱である人類種の守護者として日々身を擦り減らしていく超有能国家です。しかし人類種を守るために手段を選ばない所があり、腐敗しきった王国は人類の足枷にしかならないと判断して帝国に滅ぼさせようとしています。慈悲〜。

ですが彼らの人類種を守りたいという信念だけは本物であり、そこにホモ君が付け込む隙があります。基本法国出身でもない限りほぼ接觸の機会が無い法国ですが、名声値を一定以上稼ぐと法国勢が『味方に取り込む価値あり』として交渉してくるイベントが発生します。そこで彼らを説得し、王国を滅ぼすよりも良い案を提示することが出来れば彼らは普通に賛同してくれます。法国も別に好き好んで王国を滅ぼしたいわけじゃありませんからね。

いかに上手く法国の譲歩を引き出すか、その説得フェイズがある意味私の腕の見せ所さんな訳ですが……このイベント、発生時期がランダムなんですよね。名声値の高さと

発生確率はある程度比例しますが、あくまである程度。なんやこのクソイベ!? ここは私の祈祷力も試されると言つてよいでしよう。

✓領地に戻つた後も、あなたのやる事は変わらない。今まで通り領地を改善していき、すっかり自分のそばが定位置となつたイジャニーヤを使って不穏分子を炙り出していく。そういうえば彼女の名前は何というのだろうか……?

✓ただ今までと少し変わつたのは、他の貴族たちとの交渉が新たな仕事として加わつたことだ。あなたの改革によつて豊かになり、八本指の排除も成したあなたの領地と違ひ、他の領地は未だ貧しく、貧困と賄賂が蔓延している。きっと自分の父は、この様にして少しづつ汚職に手を染めていつたのだろう。

ホモ君が（今は亡き）父親を思い出してしんみりしてますね。八本指を排除したと言つても、あくまでそれはイズエルク領のみの話。他の貴族領ではブイブイ言わせていましたし、こつちも対策を取らなければまた前に逆戻りです。ですがピンチはチャンス、名誉値が服着て歩いてるような彼らをもう一度ぶちのめしてやりましょう。

✓『お前は自慢の息子だ』という父の言葉が、あなたの胸の中で暖かく残つている。あの時の父は、罪を暴かれているというのにどこかホツとしたような表情をしていた。卑怯な手段で一時豊かになつたとしても、それは他の何かを犠牲にしているだけだ。もう二度と、あのような事を繰り返させはしない。

あなたは他の貴族の領地經營に懇切丁寧にアドバイスを送り、彼らの領地を豊かにさせるとともに八本指の影響力を少しづつ削いでいった。

ああ、名譽値の音。前にも言いましたが、悪党をぶちのめすというのは名譽値稼ぎの上で非常にうま味です。テイストこんなもんなんぼあつても困りませんからね。このまま周辺貴族への影響力を強めつつ法国からの接触を待ちましょう。それでは法国の使者が来るまで倍速です。

（走者倍速中……）

（走者倍速中……）

（走者倍速中……）

すいませうん、木下ですけどお！　まうだ時間かかりそうですかねえ！

昼下がり。あなたはいつも通り、執務室で書類を捌いていた。

「……っ！　ホールド、今すぐ下がって」

傍にいたイヤニーヤが、突然あなたの襟首を掴んで自らの背後へと引っ張った。

……！　いつのまにか、部屋の中央にあるテーブルに誰かが座っている！　突如現れた金髪の軽薄そうな男は、こちらを一瞥するとへりりと微笑んでこう言った。

「ええー、もう見つかったんですかあ？　すげーな、噂には聞いていましたけどマジで良い護衛雇つてるんすね！」

そこからの数瞬は、あなたの目ではとても捉えきれなかつた。イジヤニーヤが暗器を抜いて飛び掛かり、室内を暴風が吹き荒れたと思つた次の瞬間には、彼はイジヤニーヤを床に組み伏せていた。

「おおつと、ちょっと待つてくださいって！ 突然来たのは謝りますから、ちょっとは話を聞いてくださいよ」

そのへラへラとした顔を全く崩さない彼を見て、あなたの脳内を一瞬で様々な考えがよぎる。自分の身を守るため、この部屋には隠し通路といくつかの武装がある。しかし、あなたの知る限り最高の暗殺者である彼女をこうも容易く制圧した相手に対し、はたしてそれが通用するだろうか？ それに相手の目的も人数も不明。そして、彼はこちらに対し確かに敵意がないように見える……。

結論を出したあなたは、落ち着いた表情で『まずは紅茶でも入れましようか』と笑つてみせた。

「おつと、話が早いのは僕的にポイント高いですよ。どうもこんにちは、スレイン法国から来た風花聖典の者です。……って、他国の人にはこう言つても伝わらないっすよね！」

来ました！ 法国の接触、しかも六色聖典です！ ちょっとタイムが遅れたときは焦りましたが、ただの下つ端ではなく六色聖典が出てきたのでお釣りが出ますよ。

幸先が良くなつた所で今回はここまで。次回はやつと来た法国とのファーストコミニュニケーションと、恐らくホモ君を裏切るであろうラナー王女対策の模様をお届けしますよう。それでは、ご視聴ありがとうございました。